

社会科同好会編⑤ 戦争証言・居森公照さんのお話 「広島の本川国民学校で被爆した清子さんの証言」

7月28日(日)午後、高井戸地域区民センターで、同好会員4名(2学年)＋社会科教員1名で、核兵器の非人道性を伝える活動をしている横浜市在住の居森公照さん(89歳)のお話を聞きました。居森さんは妻、清子さん(2016年に82歳で逝去)の被爆証言を引き継いで伝える活動をされていて、この日はご自身の戦争体験とともに語っていただきました。広島爆心地に最も近い小学校(本川国民学校)に通っていた清子さんは、200人以上いた児童で唯一生き残り、燃えさかる学校から川へと逃げました。成人後、後遺症と思われる病気・がんなどのため、幾度も手術を重ねたそうです。

本川小学校は原爆ドームから歩いて数分の場所にあり、資料館として公開されています。ぜひ、広島を訪れた際には見学してほしいと思います。

以下、生徒の感想を紹介します。

◆広島の本川小学校で被爆した清子さんの夫で、清子さんから証言を引き継いでいる居森公照さんのお話を聞いた。89歳の居森さんは国民学校での竹槍訓練や松根油採集など、ご自身の体験も教えて下さった。来年は戦後80年であり、私たちは戦争の話を知る最後の世代だと言われている。これから戦争の話伝える立場になるわけだが、居森さんのように「語り継ぐ」という選択肢もあると知った。お話の内容は自分には想像できないものばかりだった。ミズを薬として飲む、カエルや虫を食べる…。当時の子どもたちは食べる物を必死に探していたのに、今の私たちは食べられる物を捨てる立場にある。また、晩年まで語り部をされていた清子さんの被爆体験には鳥肌が立った。火に包まれる街、全身が焦げて性別も分からない人々。そんな光景を見て、思い出して語り継ぐことには相当な覚悟が必要だ。世の中には、「日本は戦争の被害者ぶっている」などという人がいるが、この話を聞いて本当に、居森さんやその他の戦争体験者にそう言うのだろうか？以前、私も似たような考えを持っていたが、居森さんのお話を聞いて考えが変わった。核爆弾そのものだけでなく、戦争という手段をとった当時の日本の代表やそれを許してしまった国民も悪かったと思う。今日も、世界のどこかで戦争が続いている。日本も間接的に参加しているのかもしれない。より平和に関心を持って、平和につながる取り組みが出来たらいいと思う。



◆ついこの間までやっていた授業の内容を復習するように知識を増やすことができ、金属回収令や戦時中の食べ物を改めて知ることができました。原爆の被害を受けた居森清子さんの視点から当時の悲惨な様子を知ることができ、後遺症はやっぱり突然現れることを改めて知ることができました。この話を周りの人や家族に教え、少しでも多くの人が戦争の怖さを知ることができたらなと思いました。

◆原爆の恐ろしさを改めて知りました。戦時中を生きてきた人たちの話を聞けるのは僕たちが最後だと思うのでしっかり心に留めておきたいと思いました。

◆居森さんのお話を聞いて、小学校の頃被爆し、一緒に被爆した人々が次々と亡くなっていく中で居森さんだけが被爆に負けずに長生きしていたということを伺ってとても驚きました。そして被爆直後川の中に数時間も入り続けると耐えられない暑さであったことがとても心に残りました。戦争は繰り返してはいけないものであり、人間一人ひとりの命をしっかりと全員が考えて生きていくことが大切だと思いました。